

【曲目解説】

●神聖な舞曲と世俗の舞曲（ドビュッシー）

1904年、パリのプレイエル商会は、クロマティック・ハーブと呼ばれる新型のハーブを完成させました。これは、ペダルによって半音変化させる従来のハーブに対して、二つの鍵盤で多くの和音が弾かれるようになっていて、ピアノに匹敵する表現力を持たせようと企画されたものでした。しかし、このクロマティック・ハーブは、プレイエル商会の委嘱により、ラヴェルの「序奏とアレグロ」やフローラン・シュミットの「アンダンテとスケルツォ」等の名曲を生み出しましたが、その後衰退してしまいます。ハーブらしい流れるような音階奏法やグリッサンドが不可能なためでしょう。

ドビュッシー（1862・8・22～1918・3・25）も、プレイエル商会の支配人、グスターヴ・リオンの委嘱により、独奏クロマティック・ハーブと弦楽合奏のために作品を書き上げました。本日演奏する「神聖な舞曲と世俗の舞曲」です。今日では、上述のラヴェル等の作品と同様、伝統的なペダル付きハーブのレパートリーとなっています。

曲は、古代ギリシャの神聖で高雅な舞踏をイメージしたもので、弦楽の短い序奏に続く大変印象的なハーブの登場から、ハーブの様々な可能性を引き出した後半まで、傑作と呼ぶに相応しい作品となっています。

(Mont)

●パヴァーヌ（フォーレ）

「パヴァーヌ」とは、16世紀のヨーロッパに普及した行列舞踏です。王侯貴族のための即席の舞踏であったようです。近現代曲で「パヴァーヌ」と題された作品としては、このフォーレのものと、モーリス・ラヴェルの「亡き王女のためのパヴァーヌ」が有名です。

フォーレは1886年に管弦楽曲としてこの曲を作曲し、翌1887年に合唱パートを追加して完成させました。詩はロベール・ド・モンテスキュー＝フェザンサク伯爵によるもので、甘美で清楚な旋律美のこの曲のイメージとは程遠く、「(前略) 我らの征服者全軍よ！ 我らが心の女大君よ！ 奴らのなんたる挑発、いつもなんたる冷徹！ 我らの命運と生活、牛耳ろうとはなんたる僭越！ 気をつけろ！ わきまえろ分別！ おお忌まわしい侮蔑！ (中略) 我らは必ず奴らを黙らせてくれよう！ (後略)」と過激な言葉が続きます。そのためか、この曲は合唱曲としても分類されますが、管弦楽のみで演奏されることが多いようです。

ラヴェルは1899年に「亡き王女のためのパヴァーヌ」を、1910年に『マメール・ロワ』の「眠りの森の王女のパヴァーヌ」を作曲しました。「亡き王女の～」は、そのタイトルと、空虚5度を用いた独特の雰囲気です。最も人気があるようですが、筆者は終始ゆったりと弛緩した感じの「亡き王女の～」よりも、情感が溢れ、哀愁に満ち、緊張感を伴った「フォーレのパヴァーヌ」により強く魅かれるものを感じます。（福田重徳）

●組曲「クーブランの墓」（ラヴェル）

この曲はラヴェルが第一次世界大戦で亡くなった友人に捧げる6曲からなるピアノ曲が原曲です。その後、ラヴェル自身で4曲を選び、管弦楽曲に編曲しました。曲は、プレリュードつまり前奏曲、フォルラーヌつまり北イタリア地方の舞曲、メヌエット、リゴードンつまり南フランスプロヴァンヌ地方の舞曲、からなります。

ところで、このクーブランの墓という曲名ですが、40数年前の子供の時から「なんて変な名前の曲名なんだろう」とずっと思っていました。今回解説を書くために調べたところ（参考：ウィキペディア）、なんとこの日本語は誤訳だそうです。フランス語では *Le Tombeau de Couperin* ですが、この *Tombeau* は墓の意味の他に、古楽では故人を追悼する器楽曲という意味があります。たぶん、恋人をくどく、否称える曲のジャンルであるセレナーデのような、17-18世紀に存在した曲のジャンルとしての名称です。したがって曲名は「クーブランを偲んで」もしくはラヴェルの作曲意図を反映するならば「クーブランなど18世紀のフランス音楽を称えて」というのが正しい日本語訳となるようです。ラヴェルは友人の死を悼む曲を、尊敬する18世紀フランス音楽の手法を用いて作曲したのでしょう。ちなみにクーブランは18世紀を代表する作曲家であり代表曲にクラヴサンつまりチェンバロの曲集があります。

さて、この曲はオーボエの難曲としてつとに有名であり、半世紀前ではプロの音楽家にとってもこの曲は演奏が困難で、クープランの墓ならぬ「オーボエの墓だ」と言われていました。現在ではプロは難なくこなしますが、アマチュアにとってはまさにオーボエの墓であり、日本では大正14年に初演とのことですが、そのときの命名は単なる知識不足からきた誤訳というより名訳にあたるのかもしれませんが。(TY)

●交響曲第3番 (シベリウス)

ジャン・シベリウスは1865年12月8日フィンランドのヘルシンキ郊外に生まれました。今年は生誕150年となります。

日本では明治40年、日露戦争から2年後、ドイツ軍がツェッペリン飛行船を購入したり、ニューヨークで株が暴落したりした1907年に、この交響曲第3番が作曲されました。当時のフィンランドはロシア帝国の強い干渉を受けていたようで、フィンランドの人々はいろんな不満を持ちながら生活していたのだらうと想像される時代です。第3交響曲は、1番2番に見られる後期ロマン派風の作風から、素朴に、純粹に内面に訴えかけるような曲へと変わり、その後の交響曲への変化点として注目されています。

なぜこのように変化したのか調べてみると、それまでに名声を得ていたシベリウスは、お金もあつてか、かなり乱れた生活をしていました。それが祟って健康を害し、お金もなくなり、創作活動も出来なくなり、ただのおやじになってしまったため、都会から田舎へ引っ越します。やっぱり、人間というのは住処が変わると順応するんですね、ちょっとやる気が出てきたおやじになりました。

第1楽章 軽快なチェロとコントラバスから始まりますが、実は3拍目から始まります。なんとなくカッコイイそんな旋律から、音が重なり重厚なものへと変化した後、長い長いヴィオラの一人旅がありますので、皆様ご注目下さい。

第2楽章 くらーい旋律から始まりますが、なーんともなくマッチ売りの少女をイメージしてしまいます。6/4拍子、弦楽器の独特なピチカートが響きが聞き取れますが、やっぱりくらーく終わります。

第3楽章 前半、弦楽の各パートが2つ、3つ、さらに4つに分かれ、アンサンブルのタイミングも難しい演奏者泣かせのスケルツォ風部分に続き、(従来なら第4楽章となつたであろう)4/4拍子となり、チェロとヴィオラがコラール風に歌いだします。音が繰り返して重なり盛り上がったところで、誠にあっけなく終わります。

この交響曲第3番は、シベリウスの交響曲中、演奏頻度が下から1、2ということですが、皆様の心の中に、北欧の森林と美しい大自然がイメージされることを願って演奏致します。(お父さん)

【アンサンブル・ディマンシュ】

第1 ヴァイオリン	石嶺寿子	菊池和俊	三瓶政一	♪時山響子	西川富之	林 俊夫
第2 ヴァイオリン	荒川奈月	長澤 澄	西村 実	松島和彦	*森 未知	若月洋人
ヴィオラ	; 柴野かおり	下山純也	*関口孝司郎	山口 彰		
チェロ	; 稲垣佑典	三次摂子	*山内美佐子	山田健史		
コントラバス	; *須賀敬亮	中川 隼	廣永 瞬			
フルート	; 徳植俊之	福田重徳				
オーボエ	; 市川亜理	山口高司				
クラリネット	; 金子千暁	塚田ありさ				
ファゴット	; 越島康太郎	吉澤輝彦				
ホルン	; 小磯 治	末平一俊	花田康紀	町田明子		
トランペット	; 内田直大	染矢祐一郎				
トロンボーン	; 桜田健彦	三次 亮	森田 敦			
ティンパニ	; 星野武徳					
ハープ	; 水野なほみ					

♪ コンサートマスター * 弦楽トップ